

京都市立芸術大学附属図書館 美術教科書コレクションアーカイブ事業  
平成28年度 活動報告

京都市立芸術大学附属図書館には、美術教育研究会が長年にわたり収集した明治以降の図画工作・美術教科書が約1500冊所蔵されている。今回の事業では、これらの教科書のうち、1945年(終戦)までに出版された約850冊を対象にアーカイブを実施する計画である。

今年度は、具体的なアーカイブ作業に先立ち、1986年に美術教育研究会が作成した「美術教育関係収蔵図書目録」と、図書館書庫内に保管されている教科書の照合や書籍の状態など詳細な実態調査を実施した。さらに、次年度以降に実施する、スキャニング及びその情報を活用するためのデータベースの構築に向けた準備を進めている。なお、本事業を推進するために、学外委員を含めた「美術教科書コレクションアーカイブ事業プロジェクト会議」を組織した。

日本の学校教育は、明治5(1872)年の学制発布によって始まった。明治時代初期の図画(美術)教育は、西洋の文化を早急に取り入れることが教育の目標であり、教科書も西洋の絵画の技法書を模倣して作成され、鉛筆画を中心とした西洋的なものであった。しかし、明治20年頃からは、フェノロサや岡倉覚三(天心)によって、日本美術を重視する国粹主義の美術教育が提唱され、毛筆画(日本画)教育が盛んになる。鉛筆画(西洋画)よりも毛筆画(日本画)の教科書が多く出版されるようになった。

この時期、京都でも毛筆を使った日本画教育の必要が叫ばれるようになり、明治20年代以降、京都独自の毛筆画教科書が多く作られた。本学の美術教科書コレクションは、明治以降の美術教科書を網羅するとともに、この京都で出版された毛筆画の検定教科書の所蔵が充実している。それらの著者には、本学の前身である京都府画学校や京都市立絵画専門学校にも関わりの深い、幸野楳嶺、巨勢小石、竹内栖鳳、山元春挙などの名前が多く見られる。

なお、教科書の各ページをスキャニングし公開する予定であるが、教科書の画像データを活用するためには、当然のことながら、必要な情報検索等が出来るデータベースの構築が必要不可欠である。基礎データとしては、「美術教育関係収蔵図書目録」及び本学図書館の蔵書検索データベース、さらに今年度実施した状況調査の情報を活用することとなるが、単なる蔵書検索ではなく、図画工作・美術教育の視点から、個々の教材の内容、ねらい、さらに表現題材など、素材や技法による検索が可能となる追加情報を含めたデータベースの構築が必要となる。「美術教科書コレクションアーカイブ事業プロジェクト会議」では、特にこのデータベースの内容に関して検討を進める予定である。

横田 学(美術学部教授)